



1993年9月

ニュース

No. 34

日本工学アカデミー広報委員会

事務局：〒101 東京都千代田区岩本町3-8-16

(東誠ビル8階)

電話：(03) 5820-6771~2

FAX：(03) 5820-6773

第10回 CAETS Convocation 出席報告

専務理事 桜井 宏



左：大会議長 Tissot 氏、
右：スイスアカデミー会長 Badoux 氏

9月14日夕から世界工学アカデミー連合 (CAETS) の第10回総会 (Convocation) が持続する工学、“社会のための交通開発へのチャレンジ”をテーマとしてスイスのチューリッヒで開催された。日本からは岡村副会長 (会長代理)、中原副会長、植之原国際委員長、得田会員 (招待講演者) 及び桜井専務理事が工学アカデミー代表として、又ゲストとして菅谷真理雄氏 (住友電工、在ロンドン) 及び樋口世喜夫氏 (日産自動車、在ブラッセル) の両氏が参加した。

総会参加者は世界27ヶ国から約150名でCAETSのメンバーである13アカデミーからはすべて参加していた。CAETSの総会は、総会とは言え一種のシンポジウムであって定型的な総会議事は別途管理理事会の方で行われ総会本体の方は総会毎のテーマによる実質的な内容についてのシンポジウムである。

今回の総会は主催者であるスイスアカデミー (SATW) 会長、大会議長の歓迎、趣旨説明の後、“社会のための交通開発へのチャレンジ”についての3人のゲストによる問題提議とも言うべき基調講演から始まった。講演者はEC交通通信 (Communication) 大臣会議長のベルギー副首相兼通信交通大臣コエメ (Coeme) 氏 (代読) 国際科学学会連合会 (ICSU) メノン (Menon) 会長及び世界工学会連合会 (WFEO) のキャロル (Caroll)

会長の3名であった。

次いで第1セッション世界の現状と変化に入り交通問題を社会的、経済的、政治的に又先進工業国の目ばかりでなく、発展途上国からの目でも見た講演が、スイス、メキシコ、インド、オーストラリアの各代表からなされたが人によって交通問題に対する視点の違いが如何に大きいかを認識させるものであった。

第2セッションでは、将来の技術が取り扱われ英国 (2名)、日本、ノルウェイ、米国、オランダよりの講師が、航空、自動車、鉄道、海運、各種輸送手段の組み合わせ、情報技術について技術変化の予想を論じた。

さらに第3セッションでは、社会経済的に交通問題が、オランダ、スイス、米国の3名の講師により語られた。

最後の総括セッションでは大会議長を助けて企画実務に参画したFrybourg (フランス) Sjostedt (スウェーデン) の両氏によって第1~第3セッションの講演からの結論が短期、長期に分れて示され、又大会議長のTissot氏よりこれからの結論を実施するための技術者の役割が語られた。

総括セッションの後、若干の時間が自由討論に充てられ、種々意見の交換が行われたが、先進国と発展途上国の考え方の違い、米国に始まる規制の緩和による多輸送手段統合企業の出現などが注目されたテーマであった。



大会会場風景

会議の結論的なものをまとめてみると

1. 異なる運送手段間、工学的な問題解決方法、国家規制の相違、伝統的な考え方の違い等、整合性が欠けていることが多くこれがいろいろな問題のもとになっている。
2. 鉄道の復権の徴候が見えてきているが、これは環境的に望ましく、またこの傾向を促進するためには国際的な組織や、標準化、国家規制の排除などが必要である。特に道路輸送力の限られている地域では道路と鉄道の組み合わせ等によるシステム化が重要でこれには情報技術の応用などが必要である。
3. 都市内交通については自動車の小型化、省エネ化、低公害化に加えて、ハード、ソフト両面に於けるインフラストラクチャーの拡充、社会経済的手段による合理化なども必要である。
4. 輸送の絶対量を減少させることには問題もあるが技術移転によって輸送量の減少は考えられよう。
5. 交通輸送問題についての技術者の役割は重要であり、持続する成長のためには技術者やそのグループと政策決定者の間の緊密な協力が重要である。

などである。

日本からの招待講演者の得田与和会員（日産自動車）の講演は極めてよくまとめられていて好評であり、さらに都市交通管制システムについての中原恒雄副会長（住友電工）の追加コメントもあって日本工学アカデミーのCAETSに於ける存在感が高まった印象を受けた。

今回の総会は管理運営面での準備が非常に良くでき

1. 今後の総会（Convocation）の予定

* 第11回 スウェーデン キルナ 1995年 6月18日～21日

テーマ：工学と環境管理

キルナは北極圏の都市で、世界最北の衛星追跡基地と鉄鉱山があり6月18日～21日は白夜で日が沈まない。

* 第12回 英国 エジンバラ 1997年5月20日～24日

テーマ：工学、革新及び社会

* 第13回 フランス カンヌ又はニース 1997年5月

テーマ（仮）：公衆衛生に対する技術の影響

なお、日本工学アカデミーが担当する総会は2007年の予定である。

2. 地域アカデミー連合

ヨーロッパの地域連合会（EURO - CASE）の結成及び北米3ヶ国（米、加、メキシコ）で話し合いが進んでいることについて報告があった。

ていて、スイス時計産業の伝統が生きているのを目のあたりにした感じであった。従って、極一部を除き殆どの講演はプレプリントが準備されて居り、最後の総括セッションのものも講演開始の時点で Frybourg, Sjostedt 両氏のものが配布された程である。日本工



講演の得田会員

学アカデミー事務局にほとんどの講演のプレプリントがあるので、別掲の講演一覧表のうちご希望のものがあればお申込み頂きたい。スイスアカデミーは年末までにはすべてをProceedingsとして刊行する予定と言っているので、詳細判明次第、会員各位よりのご注文を受けることとしたい。

総会終了後9月18日には有史以前より交通の要所であったセント・ゴットハルト峠（サン・ゴタール）及びその直下を通る鉄道トンネルを通過するツアーがあった。セント・ゴットハルト峠はヨーロッパ特に独伊間南北交通の中心であったが今から110年も前に現代の水準から満てもさして遜色のない15km近い鉄道トンネルが他国間国際協力によって実現した事実によりEC成立の遠因を見る思いがした。貨物輸送量も当時の100倍近くになり能力も不足しトラック輸送量の増加も望ましくないで間もなく高速鉄道規格による新セント・ゴットハルトトンネルの掘穿が開始されると言う。

総会休憩中の9月17日午前にCAETS管理理事会が開催されCAETSの運営に関しての各種の決定がなされた。主要なものを列記すると、

3. オランダアカデミーの加入

オランダ工学アカデミー (Netherland Society of Technological Sciences and Engineering) の加入が承認され、CAETSのメンバーが14アカデミーとなった。

4. 運営に関する諸問題についての決定

会則、会計規則の若干の変更、運営方針 (Guidelines for operations) 予算等が承認されたが既に決定、実施されていることの書類上の追認的なものが殆どであった。運営は今迄通り極めて保守的に行われている。

5. 次回管理理事会

王立スウェーデン工学アカデミー創立75周年式典と合わせて明1994年5月30日又は31日にストックホルムで開催のことに決定した。(これはその後10月31日にフィランドで開催されることに変更になった。)

CAETS Convocation 1993 Zürich 入手講演原稿等

Program and Summaries Welcoming addresses

1. J.C.Badoux, SATW President
2. L.Tissot, 10th Convocation President

Keynotees : Transport and Society

1. Guy Coeme : Vice Prime Minister and Minister of Communication of Belgium
President of European Council of Communication Ministers
2. M.G.K.Menon : President of International Council of Scientific Unions (原稿なし)
3. William J. Carroll : President of World Federation of Engineering Organizations (原稿なし)

Session I : Worldwide Situation and Evolution

1. Transportation as an integral part of a global economy
F.L.Perret - Switzerland
2. Transportaion and environment in large cities
C.A.Lamure - France
3. The case of Mexico
A.Rico - Mexico
4. The case of India
R.Mayur - India
5. Opportunities, constraints and policies for middle rank economies
I.Webber - Australia

Session II : Prospective Technologies

6. Air transportation
R.M.McKinlay - United Kingdom
7. Road transportation
T.Tokuda - Japan
8. Rail transportation
A.Wickens - United Kingdom
9. Marine transportation and inland waterways
J.Ulltveit-Moe - Norway
10. Multinational transportation
C.M.Walton - United States
11. Information technology networking in transportation and logistics
Ton van Exel - Netherlands

Session III : Socio-Economics of Transportation

12. Infrastructure networking : level of decision and continental adhesion
P.Nijkamp – Netherlands
13. Transnational medium term strategies for transportation
C.Hidber – Switzerland
14. Real cost of transportation and influence of pricing policies
K.Small – United States

Session IV : Summaries, Conclusions and General Discussion

1. Summary of Third Sesion
2. Recommendations in the short term
M.Frybourg – France
3. Opportunities in the long run
Lars Sjöstedt – Sweden

参考文献 (プレス・リリース)

“10th Convocation of the Council of Academies of Engineering and Technological Sciences (CAETS) ended”
(Sept. 17, 1993)

講演会 — 第54回談話サロン「米国大学で日本の技術論を講義して」

日 時 平成5年9月6日 (月)

場 所 弘済会館

講 師 児玉文雄会員

(埼玉大学大学院政策科学研究科教授)

(現：東京工業大学教授)



9月6日に開催された第54回談話サロンでは、1991年初めから2年余りに亘りハーバード大学(ケネディ行政大学院)及びスタンフォード大学(工学部)で客員教授として日本の技術論について講義をされ、最近帰国され

た我がアカデミーの理事でもある埼玉大学大学院政策科学研究科教授児玉文雄氏の「米国の大学で日本の技術論を講義して」と題する講演をうかがった。この講演は向坊会長のアイデアで実現したものであったので、人間ドックに入院中の向坊会長が特に病院からお出かけになって児玉教授の紹介の労をとられた。

お話は、児玉教授がこの様な機会を得て米国の大学で講義をする気持ちになった背景から始まって、吉野作造賞を受賞された御著書「ハイテク時代のパラダイム」に要約されているような新しい技術論の体系を二つの大学で講義されたときの準備から、コースの進行、講義に際しての学生の反応、両大学での学生気質の違いなど実際の経験に基づいた興味深いものであった。

また、ハーバードではこの講義に加えて、日本のハイテク企業での技術経営のケースを我がアカデミーが過半を占める日本からの講師陣の協力で実現し、その中で児玉教授御自身にも新しい発見があったことのお話もあった。

1時間弱の講演の後、植之原国際委員長の司会で質疑応答に入ったが、多数の質問の大部分が本日の講演の内容を更に判かりやすく補足する様なものであり、極めて有益であったので1時間近くに及んだ。出席会員もゲストを含めて60名を超え、多数の会員が新しい学問領域を開拓しつつある児玉教授の講演に多大の感銘を受けた。

バイオ専門部会関連会議開催報告

1. 日仏バイオテクノロジーワークショップ

日 時 平成5年6月9日－11日

場 所 ヴェルサイユ宮殿外殿

糖鎖工学および蛋白質の分離・精製を主要なトピックスとする日仏バイオテクノロジー会議が上記日時、場所で開催された。仏側 ADEBIO、日本側 JBA (バ

イオインダストリー協会) が共催し、日本工学アカデミーがこれに協賛した。出席者は、仏側 25 名、日本側 8 名であった。日本工学アカデミー会員で JBA 会長である福井三郎京都大学名誉教授を筆頭に、小川智矢東大教授、村上浩紀九大教授、筆者ら大学、国立研究機関および武田薬品工業(株)、味の素(株)など

企業からの研究者が参加した。

糖鎖工学は、糖鎖に含まれている生物情報（細胞の分子認識、細胞・細胞間の認識およびそれらの制御等）を解明しようとする新しい学問分野である。遺伝子工学、蛋白質工学と並ぶ第3の生物学の柱である。それ故、日・仏研究者の間でホットな情報交換が持たれた。一方、蛋白質の分離・精製技術は、より製品化に近い話題であったため、現場サイドのテクニックに関する情報が多かった。

いずれにせよ、このような二国間会議は、大きな国際会議と異なり、かなり詳細な部分まで互いに議論でき、かつ互いの知己を深めることができる意味で意義深いと思う。

2. 第6回ヨーロッパ生物工学会議

日 時 平成5年6月13日－17日

場 所 フィレンツェ国際会議場

メディチ家で名高いイタリアのフィレンツェで第6回ヨーロッパ生物工学会議が開かれた。インターラケンで開催された第1回大会（1978年）以来、連続して出席して来た筆者は、ヨーロッパ人の間の会議から、アメリカ、アジア、アフリカ、オセアニアを含む国際会議に発展して来ていることに驚いている。日本からの参加者は100名を越え、中華人民共和国からの参加者も20名以上いた。

会議は、ラテン的というよりゲルマン的に運営され、分子生物学から発酵工学まで生物学の広い分野にわたってセッションが持たれた。口頭発表では音響効果が必ずしも良くなかったし、ポスター会場は狭過ぎる程であったにも拘わらず参加者が会議を楽しめた理由は、イタリアの古都でルネッサンス発祥の地でもあるフィレンツェの市を背景にしたためであろうか。

次回は、1995年フランスのニースで開催される予定とか聴いている。地中海の明るく乾いた景観を楽しみたい方は一度参加されては如何でしょうか。

3. 日・スウェーデン バイオプロセスエンジニアリング会議

日 時 平成5年6月21日、22日

場 所 スウェーデン王立理工科大学およびファルマシア社会議室（ウプサラ）

この二国間会議は1988年以来毎年開催場所を日本、スウェーデン交互に変え、すでに5回を数えている。今回はスウェーデン側20名、日本側8名が出席し、ヒトゲノム解析システムやRNA technologyなど分子生物学の基礎をはじめ動物細胞用新バイオリクター、抗生物質生産プロセスの異常診断用エキスパートシステムなど興味深いトピックスについて議論がなされた。

スウェーデンは、量産的な開発研究よりも地味だが独創的な研究を尊ぶ傾向があり、この点わが国の研究者が相手より学ぶ事が多い。毎年新しい手法を考え、発表するスウェーデン研究者に対して、研究費のうで勝っている日本の研究者は、もっと独創性を発揮しなければならないと反省した者は筆者一人ではない。この意味で日本・スウェーデン会議は将来にわたって継続したいと筆者は希望している。

4. 日本・フィンランド バイオプロセスエンジニアリング会議

日 時 平成5年6月25日

場 所 ヘルシンキ工科大学

日本側出席者が筆者を含め4人であったこと、フィンランド側研究者が夏至休暇で殆どヘルシンキを離れていたため、今回は中止となった。

（文責 遠藤 勲）

外国アカデミーの紹介

前号（ニュースNo.33）で御紹介したオーストラリア工学アカデミーに引き続き、今号では王立スウェーデン工学アカデミーの御紹介を申し上げます。本稿はスウェーデン工学アカデミーのジェニファー・スンドベリー（Jennifer Sundberg）さんが特に日本工学アカデミーの会員の方々のために用意された原稿を翻訳したもので、スウェーデン工学アカデミー及びスンドベリーさんの御協力に厚く御礼申し上げます。（桜井 宏）

王立スウェーデン工学アカデミー

活発に活動する世界最古の工学アカデミー

王立スウェーデン工学アカデミー（The Royal Swedish Academy of Engineering Sciences）は世界で最も古い工学アカデミーであって、スウェーデン工業の為にエネルギーを確保することに大きな関心を持っていた技者や産業経営者によって1919年に創立された。75年近く経った現在でも（他国と同様に）エネルギーは重要な問題で近くアカデミーによって出版される最近の研究の一つの題目も“次世代の為にエネルギー”である。

1993年初め現在で、アカデミーには668人のスウェーデン人会員と30ヶ国からの220人の外国人会員

が在籍している。会員には技術者、科学者、経済学者ばかりでなく、工業経営者や政府の行政官もいる。スウェーデン人のメンバーは次の12分野から選出されている。即ち、機械工学、電気工学、土木建築 (building and construction)、化学工学、鉱業と材料、



カール・グスタフ国王

経営、基礎及び境界領域工学科学 (basic and interdisciplinary engineering sciences)、森林技術、経済学、バイオテクノロジー、教育及び研究政策、そして情報技術である。会員が65才になると同分野から新会員を選出して良いことになっている。この目的は連続的な会員の補充と活性化である。

外国人会員はアカデミーの一般会員 (general members) となる。現在アカデミーには14人の立派な方々が日本人として会員になっている。(訳者注: 14人中10人が日本工学アカデミー会員) そのうち何人かはしばしばスウェーデンで歓迎されており、アカデミー主催の国際セミナーやシンポジウムで活躍されている。

一般には別名IVAとして知られているが (IVAはアカデミーのスウェーデン語の名の頭文字を取ったものである)、王立工学アカデミーは政府によって決められた定款を持つ独立の組織で、アカデミーの理事会又は執行委員会は7人で構成されている。1993年の



フォルスベリー会長

理事長はスウェーデン大学群総長 (Chancellor of the Swedish Universities) のハグストローム (Stig Hagstrom) 教授であり、フォルスベリー (Hans G. Forsberg) 教授が1983年以來の会長である。会長はスウェーデンの首都ストックホルムで65人のスタッフを指揮している。IVAのスタッフには管理部門スタッフの他に複数のプロジェクトマネージャーがいる。プロジェクトマネージャーは技術者か経済学者で、アカデミーの会員と密接に協力しながら調査研究を企画実行したり、シンポジウムの段取りをしたり、調査旅行を組織したりしている。

目的

スウェーデン工学アカデミーの一般的な目的 (aim) は“社会のために工学及び経済科学並びに工業を促進すること”であるが、これを主な具体的目的に分解すると次のようになる。

- ・技術上、産業上、経済上の展開の監視、分析、評価
- ・技術的、経済的諸問題の検討の開始と実行
- ・社会における技術の役割及び将来の社会に対する技術の重要性の調査と解明
- ・境界領域及び国際関係での広い範囲での接触のためのネットワークの構築と維持
- ・工学や経済学分野での優れた業績の奨励と顕彰

財務

1993年のアカデミーの予算は4900万スウェーデンクローナ (約680万米ドルー原文のまま、現在では若干減価日本円で約6.5億円ー訳者) で、IVAは原資を私的、公的の両方の財源から得ている。収入の33%はIVAの産業評議会 (Industrial Council) 経由産業界から来て居り、14%は政府の贈与と補助金である。残部は会議登録料、特別の依頼事業、各種研究委員会、機関や基金などからの収入である。

アカデミーはその産業評議会から重要な支持を得ている。評議会は技術開発を行ったり、その成果を利用したり、或いはそれに資金を提供したりしている230社のスウェーデンの会社の代表者で構成されている。IVAの予算に多額の寄与をしている他、評議会の最も重要な機能はIVAが産業界や経済界との関係を強めることを援助することである。

活動

最近のIVAの会員及び研究員の仕事は次の設問への回答を見出す様に企画された4つの主要なプログラムに集約されている。即ちスウェーデンが、変化する国際社会の中でその地位を確固たるものにするために、スウェーデンの工業、商業及び社会一般はそれ自身どう変えて行かねばならぬかという問題である。4つのプログラムの題目は、

- ・スウェーデン産業の発展 (development)
- ・スウェーデン、ヨーロッパ及び地球全体のインフラストラクチャー
- ・持続する開発のための技術
- ・ダイナミックな開発のための能力と資源

で各々のプログラムは多数のプロジェクトから構成され、シンポジウム、公聴会、研究会等が頻繁に行われている。

最近の研究

過去一年半の間にいくつかの長期的な研究が完了し

た。“21世紀のための技術者”では、スウェーデン産業界の学卒技術者の長期需要が吟味された。この研究では研究員達は生涯教育のための効果的システムが必要と論じ、次の10年でスウェーデンでの能力のある技術者の需要は50%増加すると主張している。

前述の“次世代のためのエネルギー”研究は、将来のスウェーデンの研究開発で特に力を入れるべき分野を特定し、エネルギー分野におけるスウェーデンの将来の研究開発の方向に関する提言をするものである。

“知識基礎社会、その展開と振興”には、スウェーデン政府の高等教育、研究、及びスウェーデン産業の再活性化のための政策に関するIVAからの26の勧告(recommendation)が含まれている。この提言は本年初頭に政府担当官に提出され、多くの勧告は2月に議会に提案された政府の教育研究法案に採用されている。フォルスベリー教授はこの結果に満足して“たとえ政府が我々の提案の全部を採用しなくても、我々は政府と議会が長い目で見て我々の勧告を考慮せざるを得ないように仕事を続けたい”と語っている。

IVAの主な目的の1つは、スウェーデン産業の発展を促進する事である。IVAの会員と研究員は、どうすればスウェーデンが再活性化されるか、又この過程での起業家やスピンオフ企業の役割についても研究した。“21世紀のための産業再生”と名付けられたこの研究は、200人にも及ぶ産業経営者や官僚が出席した4回の公聴会に基礎をおいたものである。

生産性はもう一つの重要な話題で、IVAが最近2、3年、特にエネルギーを傾注したものである。1991年に出版された“世界最高”(Best in the World)は新しいアイデアを生み出したし、サービス会社や組織についての研究で“サービスで最高”と言う題目で広く知られているものはこの春に完了した。研究員達はサービス組織における生産性を促進し、又阻害するメカニズムが何かを確認するために、食品流通小売り、小口銀行サービス、郵便、郵便為替、学校、医療、保険会社について検討した。スウェーデンの会社や組織が外国の同種機関と比較された。

その他最近出版されたり近々出版の予定になっている研究には、国家の競争力におけるインフラストラクチャーの役割、スウェーデンの林業の将来、環境に優しい新製品開発、特許戦略などがある。この特許戦略についての研究はスウェーデンの特許戦略を日本の特許実務と比較したもので、本年9月に出版される事になっている。

生産性を上げる努力の一環としてIVAは今年第8回世界生産性会議を企画、主催した。会議に参加した60ヶ国、600人以上の代表からも大成功だったとの評価を受けている。会議のいろいろな話題の中には、技術のマネジメント、世界的な組織統合、学校や病院のようなサービス産業での生産性なども含まれていた。アカデミーは日本からも多数の有力な企業経営者や学者を基調講演者や座長として招く榮に浴した。スタンフォード大学の経済学教授である青木正彦教授、経団連副会長の佐波正一氏、新日鐵常務の富浦梓氏及びキャノン副会長の山路敬三氏である。(この項についてはニュースNo.33に富浦理事の報告が掲載されている。)

国際的ネットワーク

IVAは国際活動にも重点をおいている。国際関係部は工学や技術の面で国際協力を推進する仕事をしている。この部では、スウェーデン国王のカール・グスタフ16世陛下(His Majesty King Carl XVI Gustaf)を団長とする王立技術ミッション(Royal Technology Mission)と呼ばれている産業代表団をアレンジしている。日本は1985年と1990年の2回に亘ってこのミッションの目的地であった。この部は他のグループの人達、例えばスウェーデンの技術系大学や経営大学院の学長達などの研究旅行も企画している。

IVAはCAETS即ち世界工学アカデミー連合の会員であり、又アカデミーは最近設立されたEURO-CASE(European Council for Academies and Societies of Engineeringヨーロッパ工学アカデミー・学会評議会)の創立会員となった。

将来に向かって、IVAの75周年

1997年には王立スウェーデン工学アカデミーは創立75周年記念日を祝うことになっており、各種の祝賀記念行事の計画が進められている。

IVA会長のフォルスベリー教授は“IVAの会員と海外の専門家により、我々の前にある機会と危険を特定する様な10乃至12のシンポジウムを企画したい”と語っている。又、更に“将来の職場の様相についても考える事にしたい。そこでどんな仕事があるのか？2020年の職場はどうなっているか？この計画では新しい対象—将来の勤労者であり、又政策決定者でもある現在の若い人達—に目標を定めても良いと思う”とつけ加えている。

IVAの意見によれば、人類が我々の惑星に与えた損傷を正すための唯一の道は、現在我々が使うことのできる技術を注意深く利用することであり、この



The Engineering Academy of Japan

News No.34, September 1993

方法によってのみ我々の社会を形づくる事が出来る。

フォルスベリー教授によれば、IVAの様な組織は変化と危機の時代にもっと重要なものとなり、“変化のスピードが速くなりこそすれ、遅くなることのない我々の周囲の世界に対して、我がアカデミーには

スウェーデン社会が如何に適応するか分析し、協力することが求められている。IVAは我々の周りの世界からの信号を理解し、それに応える政治家や、研究者や、企業経営者を助けるために出来ることを実行したい”と考えている。

英国王立工学アカデミー・フィリップ殿下賞推薦依頼

英国王立工学アカデミー (The Royal Academy of Engineering - 昨年、The Fellowship of Engineeringより改称) より、同アカデミーで1991年以来毎年授賞しているフィリップ殿下賞 (The Prince Philip Medal) の推薦依頼が、会長宛に届いております。〆切は11月初めとなっております。

この賞は国籍の如何を問わず、工業全般に対してその実施、経営、又は教育を通じて大きな貢献をした技術者に与えられるもので、1991年にはジェットエンジンの開発に貢献したFrank Whittle卿が、又1992年には天然ガス工業の近代化への貢献についてDenis Rooke卿が受賞していますが、王立アカデミー

では本賞の本来の趣旨に基づいて、CAETSメンバーアカデミーの協力を得て他国からの候補者も含めて受賞者を選考したいとの希望で、前広に依頼があったものです。

なお、エディンバラ公フィリップ殿下 (HRH The Prince Phillip, Duke of Edinburgh) は、ケント公 (HRH The Duke of Kent) と共に王立工学アカデミーの王室会員 (Royal Fellow) に推薦されています。

会員各位から推薦の御意向があれば、10月末迄に事務局まで御連絡頂ければ、会長、理事会等にEAIとしての推薦を検討して頂きます。

古川 静二郎 会員

東京工業大学大学院総合理工学研究科
研究科長・教授
平成5年9月14日逝去 享年59歳

謹んでご冥福をお祈りいたします

事務局からのお知らせ

日本工学アカデミーのニュースとインフォメーション保存用のバインダーを用意致しました。

御希望の方は同封のハガキに、御名前・御住所を御記入の上、事務局まで御返送下さいますようお願い申し上げます。

編集後記

急激な円高や天候不順の影響などから、景気が一段と悪化する懸念が強まっている中で当アカデミー会員からの会費の納入が、頗る順調に進んでおりますことは、誠に喜ばしいことであり、ご支援に対し、心から感謝申し上げる次第であります。

平成5年度の大きな事業である第3回国際シンポジウムも、来年3月の開催に向けて着々と準備が進められております。ここにニュース34号をお送りします。今回は、過日、スイスで開催されたCAETS総会出席報告を中心に、同管理理事会報告、第54回談話サロン等を編集しました。本号を含めて、お気付きの点、ご意見等がありましたら、お寄せ頂ければ幸いです。

9月14日に、ご逝去されました古川静二郎会員のご冥福をお祈り申し上げますとともに、皆様のご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げます。

(編集子)